

酔いどれ船

北 杜 夫



# 酔いどれ船

北 杜 夫



新潮社版

よ ぶね  
酔いどれ船

●著者 <sup>きた</sup>北 <sup>もりお</sup>杜夫 ●発行者 佐藤亮一  
●印刷所 株式会社金羊社 ●製本 新宿  
加藤製本 ●発行所 株式会社 新潮社  
東京都新宿区矢来町71 〒162振替東京4-808  
電話 業務(03)266-5111 編集(03)266-5411  
昭和47年4月15日発行 昭和50年4月30日11刷

定価1020円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Morio KITA Printed in Japan, 1972

目次

プロローグ	5
第一話 先祖の一人、三太郎の物語	13
第二話 或る一人の叔母の物語	37
第三話 また一人の叔母の物語	99
第四話 或る一人の叔父の物語	147
第五話 或る一人の若い女の物語	211
エピローグ	279

装  
画  
管  
井  
汲

酔  
い  
ど  
れ  
船



## プロローグ

おれは岩礁の上に立つ。すっ裸で、かぐろい陽光ひかりにさらされて。

目の下の、ゆらめきもつれる水脈みおの濃淡。それは、ひとしきり黙もし、さりげないうねりとなって近づくと、一瞬、岩に碎けて咆哮する。藍に溶けこむ純白の泡沫みなわ。水流は噎むせび、やがて、かそかな咳きへと戻る。

陽は矢のごとく降りそそぎ、褐色かちの岩は濡れしよぼたれてなまめく肌となり、潮の香がどぎつく四方よにくすぶる。

微風の蠢惑、まっ昼間の海の媚薬こび。

おれは岩礁の上を伝う。青臭い体から塩水を滴らせつつ。



蝕まれた岩にかこまれ、ここに、ゆるやかに澄んだ水のたまりがある。外海のざわめきは遠く、もうい沈黙のなかに静まる灰色の砂地を底にして。ときおり、その不動の砂がうごめく。砂をかぶった小さな貝がら、その中に棲む醜い生きものが這いずりだす。

おれは覗きこむ、乳臭い魂をうつろにして。

おれの顔かたちが水面みなもに映る。見すばらしい形骸、若さだけの肉しむらのかげ。

海鳴りはすでにいずこかへ消え、孤ひとり、おれはうずくまる。しんとなって、おのが鼓動に耳をかたむけながら。

だが、このわずかな海水のたまりに、あちこちの岩のくぼみに、ひそやかに生きる者たちがある。おれよりもふてぶてしく、うそ寒い意識とて知らず。

海に棲む肉いろの星、柔らかな石ころ、はてはふしぎな触手をのばす軟体動物や腔腸動物ども。おれが静かになって息をひそめると、せいづらは更めてのびをする。この海の産んだ臓腑、塩の異形の嬰兒たちが、吐息をつき、のたくり、ごそごと埃に似た砂地をよろばいだす。惰眠の極みのごとくゆるやかに、かつ、くらい深海の畏怖のように貪婪に。

水の面おもてはこゆるぎもせず、このあくどぎ生と殺戮ほめうたの讃歌を黙殺する。古く、気の遠くなるほど古く、醜みにくく酔しつくした海と時のまえに、なんの戦慄おののそも要りはずまい。

とりどりの汚れ腐った、また彩り豊かな生きものども。おまえらのまえで、おれはかばそく獣けだものの歌をうたう。おまえらに代って、低く、かすれた人間の声と言葉で。

千万尋の重たい遠み

ここに光もなく音もなく

どろりと淀んだ海の底に

星霜も知らずとぐろを巻き

籠ゆるがごとき漆黒を

噉い尽してこの遊星と

その子供らを見守るのは

老いた海蛇のわしなのだ

海蛇の色とてない鱗の上に、瘡となったフジツボや微生物、その分身がここに生き、うじうじと軀をゆるがせ、ずっしりと根をはり隠微な息をつく。彼らに獣の悩みはなく、彼らに、いんげんの羞恥もなく、とりどりの色合はあざけるように燃えたち、水のゆらぎ、そこに溶けこむ陽のひかりをむさぼるさまは、快樂そのものではないか。

おれはふと身じろぎし、荒々しく立上って、岩礁の上をふたたび伝う。すっ裸で、人間の癡と情をくすぶらせつつ。

かぐろい陽の痛みだ。刺すような潮の匂いだ。

おれは心なき下等動物のかげのままで、なおも獣の歌をつぶやく。

古く淀む海の落し子たち

おまえらのゆえもない身ぶり

そのどろんこの営みから

おれはにんげんの悲しみを痛いまでに思う

この蒼天と海のさ中に

いつしらず獣の香を求め

獣の肉に焦がれる

わが胸を焼く淫心

ひとすじの淫心

この鋼のごとき淫心はなにゆえであろうか

ああ むなしく海があり蒼天がひろがり

そして今ここに

思念なく 声なく

ただひたすらの淫心がある

おれは岩礁の上に突っ立つ。どすぐらい胸の思念を滴らせながら。

ふたたび潮騒のとどろきが耳によみがえってくる。それと共に、いくつかの記憶、おれの血脈の中

に伝えられた聞き覚えの物語が、おれの脳細胞を、いや、おれの乳臭い胸の奥がをゆすぶりやまぬのだ。声もなき海の落し子たち、おれはおまえらの同類だ。おれの先祖は海に生き、涯しない大空の下大洋のさ中を流れながれて、遠い異国へも達したという。それはおれの先祖のいた村と家に伝わる、文書にも残っている記録なのだ。

おれの先祖が暮っていたのはひなびた漁村だ。誰も彼もが海につながって生き、潮風を呼吸して育ち、波のうねりのように働き、やがて老いたり、遭難したりして死んでいった。海胆のように鋭い棘をもち、ごろりところがっていた男もいた。海星のように、たそがれと共に動きだし、獲物をからめくるみこんでしまう女もいた。海仙人掌のように、夜の帳にひとしきりの燐光を放つ腕達者な漁師もいた。かさかさに日焼けして、荒い冬風に肌も荒れ、あなたこなたの港々へ航海する船子もいた。

その中で、怖ろしい漂流の末、遙かに遠く海を流れて、地球の涯へまで消えていってしまったのが、おれの先祖の一人。そこはメキシコという国だという。何人かの仲間が、幾年かののちに辛酸を経て生きて戻ってき、幕府の役人に事の顛末を伝えた。おれの先祖はついに戻らなかつた。大方、異国に残ったまま朽ち果てたのだらう。

昔のおれの一族は、やがて村一番の網元ともなつた。なかんずく、おれの祖父は明治の中ごろ故郷を捨てて東京へ出、南洋一带をのし歩く海商としてあくどく富を積んだ。荒海育ちのその鱈は、文明開化の都会人よりも肥え太つた。それは海の生物どもの諍いと同じ剛き原理だ。

小暗い海の底、魚族たちはそれぞれ幾千万の、ときには億を越す卵を産む。孵つた稚魚たちは、水の重みに堪えて浮遊し、大半が食われ、くたばり、わずかに成長したものは、おのが流儀に獲物

を追って鱗をきらめかす。

祖父は南洋の或る島では酋長同然であったそうだ。沖繩人を集めて酒造りもやったというが、海賊みたいな存在でもあったのだろう。混血の子も残したらしいし、内地には肌白の妾が幾人もいた。彼は本妻の男の子には持船にならって必ずその名に「丸」の字をつけ、妾の男の子たちには「渡」の一字をつけさせた。彼は豪放に海に生き、財を築いては散じた。

その頃から、かなりの歳月が流れたのだ。おれの祖父が死んで、はや半世紀以上が経つ。ふくれあがった一族は、ある者はまともな業につき、ある者は零落し、ある者は学者として名を成した。いずれも祖父が鼻先でせせら笑う事柄であつたらう。彼自身はたとえてみれば大きな回遊魚であり、北洋を泳ぎまわる鮭の群れが、その最後に河を遡って産卵し、つめたく白い死骸むくろとなる天然の摂理以外の思想を持ち得なかつた。彼は海の生きもの同然に、無意識に生き、おおらかに交合まぎわいし、数多の子供をこしらえ、老いさらばえて消えていった。

おれにはそれゆえ、いろんな親戚、数多くの叔父や叔母、従兄や従妹たちがいる。誰がどんなふうにつながっているのか戸惑うほどに複雑に、海の中に生きる原生動物から硬骨魚類までの多様さで。正直いって、おれには何が何やらわからない。

ある魚は珊瑚礁の洞穴に閉じこもり、一生を限られた範囲で過す。まるで移動性のない石灰の花、アミガイにも似て。一方、おどろくべき距離を泳いでゆく宿命に縛られた種属もいる。やむを得ぬ放浪の旅路をたどる魚だっていることだろう。人間であるおれの一族は、すべて魚介の同胞だ。

ともあれ、おれの先祖がおおむね広漠たる大洋に生き、その一人は遠い異国まで流れていったとい

う血の香りは、おれの叔父、叔母たちに伝わっている。

その幾人かは故国を半ば捨てた漂泊者だ。狭い島国には住みかねる異端者たちだった。ゆえよしもない放浪の性、それがおれの一族の特徴だし、おれはそのことを誇りと思う。

岩礁の上を、つかのまの夢から目覚め、おれはいらだたくあてどなく伝う。すっ裸で、かぐろい陽光にさらされて。

素足の裏を、ちくちくと荒い岩肌が刺す。鼓膜によみがえってきた海鳴りのとどろきと眩き。さんと降りしきる痛みまでの陽光の矢。

おれの生きる世界はやはりここだ。また想像もつかぬ海の底、海の涯だ。

おれの血脈は波さわぎ、ひとしきりの孤独と恍惚がおれの軀を包みこむ。

おれは褐色の岩に立ち、眼下にたゆたう水脈の色どりを見つめ、そして、かぼそくしわがれたにんげんの歌をうたう。

おれの先祖の言い伝え、おれの同族の放浪者のごとき暮しぶりの陰影。それはまだ若いおれを突き、乳臭いおれの心を根源までゆさぶる。それはあくまでも濃い空と海の彼方へとおれを誘い、かつと胸を焼きつくしては溶け去ってゆくようだ。

おれは岩礁の上に、長いこと突っ立つ。ゆえよしもない気の昂りに身ぶるいしつづ。  
かぐろい陽の痛みだ。刺すような潮の匂いだ……。



第一話 先祖の一人、三太郎の物語



天保十二年辛丑の秋、摂州兵庫津の酒戸中村屋猪兵衛なる者、所持の舶千石積二十八反帆栄寿丸へ、船頭善助水主弥市等十三人乗組、酒、沙糖、綿、線香、塩等を装載し、奥州南部へ趣き、干鰯を買むとして八月廿三日兵庫を開洋し、……十月六日六西風になり、舶の補繕も整ひしかは、網代浦を出帆し、復浮津沖まで乗下りしに、風順よからずなりて、四五日の間沖合にゆられ居りたりしか、同十一日東風強く吹発り、網代沖まで吹返され、復追風に吹変りしかとも、此処にて船かゝりせむと碇を下せしに、此辺は海深く二房綱（二百尋）にせしかとも、猶海底に届かさりしかは、碇を巻あげ、帆を手打懸にして東の方へ吹流され居たりしに、翌十二日浮津浦近く吹寄られ、黄昏に総州犬坊岬を東へ廻らむとせし折から、俄に乾風吹発り、波濤激揚し、其烈しき事奔馬の如く、船を飛す事宛も落葉の疾風に迅散するにひとしく、一瞬の間に颺放せられし事幾千里なるをしらす。舵を引あげ舷に縛り、碇二頭を舳の左右へ二房綱にして、跡すざりにし、装載をはね棄、船足を輕め、湓をかすりなどして命かきりに働さしかとも、殆しのきかねたりし。同十三日の夜二更頃より、颺風猶亦烈しく号濤雷霆の如く、狂瀾の潰怒山嶽の頽潰するか如し。左右の牆廻りは濤に破られ、外艫も碎けとひ、棚もさけ、用水桶までも飛散し……

（東航紀聞卷之一より）